

ShylockとAntonioの憎しみについての一考察  
A Study of Antagonism between Shylock and Antonio  
in *The Merchant of Venice*

菊地 善太

KIKUCHI Zenta

The antagonism between Shylock and Antonio in *The Merchant of Venice* is not an individual problem of Shylock and Antonio but a problem of prejudice and discrimination between Jews and British, or Judaism and Christianity. This paper aims at studying the background of the work, and considers the intention of the author and the meaning of the work in the 21<sup>st</sup> century.

1. はじめに

*The Merchant of Venice* における Shylock と Antonio の憎しみの問題は、彼ら二人の個人的な憎しみの問題というよりは、ユダヤ人と英国人、ユダヤ教とキリスト教という、互いに相容れない民族間、宗教間の差別と偏見の問題である。

Shakespeare は典型的なユダヤ人として Shylock を登場させ、対する典型的なキリスト教徒として Antonio たちを登場させた。キリスト教徒である Shakespeare の書いた物語は、当然のことながら Antonio たちキリスト教徒に最終的な勝利を収めさせ、Shylock は人々の嘲笑を受ける結末になる。

しかし一方で、Shakespeare の視点は、金貸し業でしか生きられない、虐げられ迫害されつづけてきたユダヤ人の哀れな立場にも向けられている。第三幕一場、Shylock の... and what's his reason? I am a Jew. Hath not a Jew eyes? hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? ... (ジューには眼がないってのか? 手がないってのか? いやさ、臓腑、五体、感覚、感情、そしてまた喜怒哀楽がないとでもいうのか?)<sup>1</sup> というくだりの台詞は、我々の胸を深くえぐるものであろう。

本稿では、まずユダヤ人と英国人、即ちユダヤ教者とキリスト教徒がいかなる対立関係にあっていかなる背景のもとでこの戯作が書かれたかを調べ、作者 Shakespeare の意図を考察したい。そして最後に、本作品の現代的意義、即ち21世紀になった今でも相変わらず民族の対立から抜け出せず、テロ殺戮だの報復戦争だのと言っている現代人が、この作品から学ぶべきことを考えてみたい。

## 2. ユダヤ人差別の歴史と作品の背景

まず、Shakespeare の時代における英国人が、ユダヤ人をどう思っていたのか、その差別の歴史と作品の書かれた背景を見ていきたい。

大澤武男はその著『ユダヤ人とドイツ』<sup>2</sup>の中で、「<ユダヤ人>という言葉はキリスト教文化圏では常に一種の宗教的差別概念として、また少数派、無国籍放浪者としての社会的差別概念を含む言葉として用いられてきた」<sup>3</sup>と述べ、理由として、キリスト教徒の間で、ユダヤ人を「救世主キリストを殺し、永遠に神から呪われ、放浪の身分にある」<sup>4</sup>とみなす思想が神学的基礎として根付いていたことを指摘している。

大澤によれば、ヨーロッパにおけるユダヤ人の迫害は第一回十字軍（1096-99）より始まり、商業で栄えていた彼らは上記偏見から格好の標的となった。ユダヤ人は「高利貸し」として非難され始め、1215年の第四回ラテラノ宗教会議以降は公職を追われ、職業組合ギルドからも締め出され、土地所有も国際商取引も許されなくなり、14世紀までにはユダヤ人の生きる道は、13世紀以降キリスト教徒が営めなくなった「利息をとる金貸し業」だけしか選択肢がなくなっていた<sup>5</sup>。したがって中世ヨーロッパにおいては、上述の差別思想と相まって、ユダヤ人とは即ち高利貸しであって、金貸しにより暴利を搾取している者との固定観念が定着していくことになった<sup>6</sup>。

そもそも金利を罪悪としてみなす考え方は、中野好夫によれば古くアリストテレス（Aristoteles）の『政治学』（*Politics*）に倫理的根拠があるとされる<sup>7</sup>。アリストテレスの「まるで金に繁殖能力があるかのように、金に金を生ませることはもっとも不自然だ」という考え方である。

中野は、Shakespeare の生きた16世紀後半から17世紀にかけての時代は、まさにこの延長上にあると言う<sup>8</sup>。当時の英国は13世紀末のエドワード一世（Edward I）の禁令によりユダヤ人はほとんど住んでいなかった。しかし、1590年ごろにマーロウ（Christopher

Marlowe) の『マルタ島のユダヤ人』( *The Jew of Marta* ) でユダヤ人を悪役とした悲劇が上演されて成功し、更に1594年にロペス事件という女王陛下暗殺未遂事件が起き、女王の侍医であったポルトガル系ユダヤ人のロペス ( Lopez ) がその首謀者として目されたことから、当時の英国でユダヤ人に注目が集まった。Shakespeare の *The Merchant of Venice* はこういった背景のもとで書かれた作品である<sup>9</sup>。

### 3 . Shakespeare の意図

さて、上記で見てきたように *The Merchant of Venice* の作品登場の背景には、キリスト教徒のユダヤ教徒 ( ユダヤ人 ) に対する差別の思想、迫害の歴史、そして直近の許すべからぬ事件があった。ここでは、そんな中で Shakespeare がどのような意図で作品を仕上げたかについて考察したい。

*The Merchant of Venice* は、アーデン版テキスト<sup>10</sup> の巻末にも *Il Pecorone* など幾つか紹介されているように実際には種本が幾つかあり、筋書きとかはそれらから引用されたと言われている<sup>11</sup>。なるほど *Il Pecorone* では同様な人肉裁判の話と指輪交換の話が書かれているが、私は Shakespeare の作品は単なる引用や継ぎ接ぎではないと考えるものである。

*The Merchant of Venice* が Shakespeare の作たる所以は、その言葉、登場人物が語る生き生きとした台詞にあると考える。冒頭で引用した第三幕一場の Shylock の台詞<sup>12</sup>などは、誰もが *Il Pecorone* から引き出せるものではなく、Shakespeare ならではの思いが、そこには込められているはずである。

では、台詞に込められた Shakespeare の思いとは何か。私は、一つにはロペス事件で生じた人々のユダヤ人に対する怒りを演劇というフィクションの場で笑い飛ばさせて浄化させること、そしてもう一つはユダヤ人に対する英国人の行動の正義を問い慈悲を訴えかけるものではなかったかと考える。

生々しい怒りも喜劇の嘲笑で吹き飛ばせば気持ちがすかっとするものである。その効果を Shakespeare は商売の皮算用以外にも考えていたのではないか。そして後者は文字通り当時のユダヤ人観に対する疑問をぶつけたものではないか。表立って言えない、心にちょっと引っかかる疑問を、Shakespeare は悪役の Shylock の言葉に刻んだのではないか。娘の Jessica を登場させて幸せにしたのも、ユダヤ人をどこかで憎みきれない

Shakespeare が、改宗すれば幸せも得られるというユダヤ人にとっての「救い」を作品に盛り込んだと考えると納得できる。

尚、作品では *Il Pecorone* にはない「箱選び」の筋が加えられているが、第三幕二場の、Bassanio の箱選びの台詞<sup>13</sup> を朗読すれば、見せかけだけの真実に捕らわれない、巧みな弁舌に惑わされないことも、Shakespeare の言いたいことの一つであろう。主筋ではユダヤ人は敗れるが、そんなことは見せかけだと Shakespeare は主張しているのだと私は考える。

ユダヤ人問題の解決という箱を観客の一人一人に選ばせること、これこそが Shakespeare が真に意図したことではなかろうか。

#### 4 . 作品の現代的意義

最後に、本作品の現代における意義を考えたい。2001年9月11日、アメリカ合衆国の高層ビルにハイジャックされた旅客機が飛び込むという前代未聞の大惨事が起きたが、この首謀者がイスラム教徒の過激集団である、テロ組織アルカイダと深く関わっていると見られたことから、アメリカ合衆国はテロ組織アルカイダの撲滅を訴え、テロ組織の本拠地があるアフガニスタンに報復戦争を仕掛けた。アフガニスタンでの戦争は終結し、アルカイダを支援したタリバン政権は消滅したが、破壊と殺戮の戦争によりアフガニスタン市民が受けた被害は大きい。

一方、テロ事件が起きた当初、全米各地で反イスラムの差別行動が引き起こされ、罪のないアラブ人が迫害されたと報道された。一握りのイスラム原理主義者による悪事のために、罪のない者への差別行動が起きてもいいのか、或いは戦争まで引き起こされてもいいのか、平和を願う我々は真剣に考える必要がある。

アメリカ合衆国政府は、今度はテロ組織を支援したとしてイラクへの武力行使を検討している。これを書いている2003年3月16日現在、フランスやドイツやロシアが政府レベルでアメリカの方針に反対を表明している他、今度は世界中から、アメリカ合衆国の国内からも、市民による反戦の声が聞こえてくる。だが、2003年3月、現在はまさに開戦前夜といった緊迫した状況にある。

日本では、今は戦後と言われて久しい。だが、国家間、民族間の対立・紛争は絶えず、戦争の火種はこの国にも無縁ではない。上記イラクへの戦争にしても、日本政府は中立な

立場ではなく、アメリカ寄りの姿勢を明確にしており、もし戦争が始まれば、日本もまた戦争に巻き込まれる。

イラク問題だけではない。2002年9月17日の日朝首脳会談は、北朝鮮首脳がようやく日本に対して対話を求めてきた記念すべき会談となったが、一方で日本から北朝鮮に拉致されて当地で亡くなられた方が8名もいたと報道され、日本国内で北朝鮮を非難する声が高まった。その後、5人の拉致被害者が日本に一時帰国し、一旦は両国の関係改善が期待されたが、5人が北朝鮮に戻らずに日本に残ったことを北朝鮮側が納得せず、両国の関係は急速に悪化している。2003年1月、北朝鮮は核不拡散条約(NPT)からの脱退を宣言し、核兵器の開発、使用までもが危惧される事態になった。

このように、まさに今も、国家対立、民族対立によって人々がいがみ合い、憎しみ合い、戦争が始まろうとしている。*The Merchant of Venice* の現代的意義は、まさにこういった国家間、民族間の対立や憎悪について、役者の一人一人が、観客の一人一人が、それぞれに平和的解決のために思いをめぐらすところにあるのではなからうか。解決の為の選択箱を見つけて、それを選んでいかななくてはならないのだ。いつか「民族の対立」や「差別」という言葉が死語になるまで、*The Merchant of Venice* は我々に民族問題を問い掛けるであろう。私は、21世紀は民族・文化が衝突する世紀ではなく、相互理解と融合が促進される世紀になってほしいと切に願うものである。

---

<sup>1</sup> Shakespeare, William, ed. Brown, John Russell, *The Merchant of Venice* (The Arden Shakespeare), Methuen & Co. Ltd, 1955 (Reprinted by Thomson Learning, 2000), III.I.52-66

訳文は、シェイクスピア作、中野好夫訳『ヴェニスの商人』岩波書店(岩波文庫)1939年、p87より引用した。

<sup>2</sup> 大澤武男『ユダヤ人とドイツ』講談社、1991年、

<sup>3</sup> 同上、p.10

<sup>4</sup> 同上、p.20

<sup>5</sup> 同上、pp.32-33

<sup>6</sup> 同上、pp.39-40

<sup>7</sup> 上記、『ヴェニスの商人』、巻末「解説」p.207

<sup>8</sup> 同上、p.207

<sup>9</sup> 同上、pp.204-206

<sup>10</sup> See above, *The Merchant of Venice* (The Arden Shakespeare)

<sup>11</sup> Ditto, pp.xxvii-xxxii

<sup>12</sup> Ditto, III.I.52-66

<sup>13</sup> Ditto, III.II.73-107

## テキスト

Shakespeare, William, ed. Brown, John Russell, *The Merchant of Venice* (The Arden Shakespeare), Methuen & Co. Ltd, 1955 (Reprinted by Thomson Learning, 2000)

## 参考文献

シェイクスピア作、中野好夫訳『ヴェニスの商人』、岩波書店（岩波文庫）1939年

大澤武男『ユダヤ人とドイツ』、講談社、1991年

『ニューズウィーク日本版』臨時増刊号2001年9月24日号、TBSブリタニカ、2001年

サンデー毎日緊急増刊『ブッシュ帝国の「野望」』、毎日新聞社、2003年

『ニューズウィーク日本版』2003年3月19日号、TBSブリタニカ、2003年